

太宰府の文化財

(251)

田中の森

都府楼南一丁目所在



▲田中の森（東側から撮影）

鷺田川に架かる田中橋の近くに、田中の森という小さな森があります。ここは田中長者で知られる田中熊別の墓といわれ、西陵とも呼ばれています。現在クロガネモチとタブノキがあり、その根元に板碑があります。クロガネモチは樹齢200年以上と考えられ、かなり剪定されていますが、りした樹形をしています。樹高約13m、幹回り2・9mの市内最大級のクロガネモチです。

この田中長者と二日市の虎丸長者が勢力くらべをした次のような昔話が残っています。「昔、通古賀に田中長者という大金持が住んでいた。広い屋敷と、こちらの山から向こうの山までといわれるほどの田島を持ち、「お家が千軒、お蔵が千軒、田中長者は物持ち長者、お米の山に、金の山」と、村の子どもたちは、はやした。ある日、隣村の虎丸長者が1000人の家来をひきつけて、宰府のお寺にお参り

をした。その帰り道、にわか雨が降りだしたので、近くの田中長者の家へかけこんで、「どうか笠を貸してください」とたのんだ。田中長者は困った顔もしないで、にっこり笑い、蔵の中から1000本の真新しい笠をだして貸した。虎丸長者の家来たちはびっくりし、虎丸長者は口惜しくならなかった。明るる日、虎丸長者は家来の中から大飯喰らいを1000人選んで、「きのうの笠を返してこい」と命じた。長い笠の行列が続き、1000人目の家来が着いたのは昼過ぎになった。田中長者は、その1000人を広い座敷に通して、「皆さん、よくおいでになった。ちょうど御飯を炊きすぎて困っていたところですよ。どうかたくさん食べてください」と、大それた御馳走でもてなした。虎丸長者の家来たちは、いよいよびっくりした」という昔話です。

この昔話の最も古い記述は、寛政2年（1790）に編集された「王城神社縁起」に見ることができ、「昔武蔵ノ長者王城大明神に参詣せし時、俄に雨降りて笠を百箇国術の長者に借りけるか、返す時一眼の男一人に笠一ツ宛持せ返しけるとなり、田中の森、…」とあります。

現在の昔話と若干異なる部分もありますが、200年以上前から語り継がれていることが明確な伝説であり、この森は伝説と共に大変貴重なものです。



▲クロガネモチとタブノキの根元にある板碑

太宰府の文化財

(252)

太宰府天満宮参道の一の鳥居

高さ 約7.8m 幅 9.5m
元禄9年(1696)



▲石材の合わせ目に挟み込まれていた銅銭

太宰府天満宮の参道は昨年秋の九州国立博物館の開館以来、連日多くの人で賑わいを見せています。この参道は天満宮参詣のために造られた道で、江戸時代には現在より数メートル幅が広がったよう、今でも往時の石組みの側溝が参道沿いの店舗内でガラス越しに見ることが出来ます。

参道を象徴するものに石畳と鳥居が挙げられますが、鳥居は現在では駅から太鼓橋に至るまでに4基が建てられています。昭和18年まではさらに駅側に江戸時代に建てられた銅製のものがもう1基ありました。

現在の一の鳥居は参道と通称「小鳥居小路」が交わる場所にある元禄9年(1696)の銘が入られた江戸時代のものです。この鳥居は当時の筑前黒田藩主であった黒田綱政が建立したもので、礎石を含めると17の部材から構成されています。左側の柱に「元禄九年祀歳次丙子三月朔旦、右柱に「本州牧従四位下源朝臣綱政建立」と彫られています。

黒田家は初代長政が関が原の勲功で52万石の自身の大名となりましたが、彼の父孝高(如水)が秀吉の腹心でキリシタンであったため、徳川家に忠誠を強く示す必要があり、江戸城石垣や日光東照宮の参道と鳥居の建設などの石造建築物の普請事業に精を注ぎ、幕府に認められた経緯があります。黒田家は筑前領内でも戦乱の世が終わったことを人々に示すため、積極的に荒廃した神社仏閣の修築をし、香椎宮、箱崎宮などの有名神社の入り口に藩主の名前を刻んだ石鳥居を建てました。

天満宮参道一の鳥居は天満宮に信仰の厚かった四代藩主綱政が寄進したもので、優美で整った形態を持った江戸時代前半を代表する作例といえます。柱が中央で上下2段、上に乗る笠木という反った部材が3つに分かれているのがこの時代の特徴といえます。昭和63年に一度解体された際に、部材の間から寛永通宝をはじめとする393枚の銅銭が発見され注目されました。

(こ興味のある方は図書館にある「太宰府の文化財第19集 太宰府天満宮参道」を参照ください)

太宰府の文化財

(253)

古川章家主屋

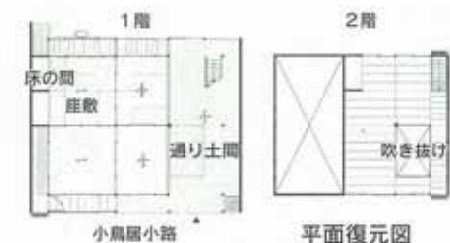
明治29年

宰府三丁目所在



▲古川章家主屋（平成15年撮影）

現況断面図



1階
座敷
通り土間
小鳥居小路

平面復元図

太宰府天満宮に向かって参道を進むと一の鳥居の前で十字路にあたります。左手の連歌屋の方のびる小鳥居小路（小町）の中ほど東側に古川章家主屋があります。ここは最近韓国料理店が開店しましたが、もとは古川百貨店と号して雑貨屋を営んだ由緒がある家屋なのです。現在のご当主のご先祖にあたる古川善次郎さんが建てられ、その後近年まで古川金物店として近隣はもとより宇美や志免からの人々からも親しまれてきました。家屋台帳によると明治29年建築と記載されており、今

年で建築110年を迎えることになりました。敷地は通りの間口より奥行きが深い町屋の形をしています。通りに面して主屋があり、裏側には中庭の奥に2階建の隠居屋と土蔵が建っていました。出入りは主屋の土間以外に、北側の通路からできていました。現在は料理店となりました。主屋だけが残っています。主屋は平入りの木造2階建、屋根は切妻造で椽瓦葺き、三方に下屋をめぐらせています。外壁は柱が見える真壁造白漆喰仕上げで、軒裏は垂木露し、側壁は柱まで漆喰を塗る大壁造白漆喰仕上げで軒裏まで塗り込めています。内部は南側に通り土間を、北側に田の字型に部屋を造り、奥側2部屋を続き間の座敷として、竿が床の間に向いた床差しの竿

造り、奥側2部屋を続き間の座敷として、竿が床の間に向いた床差しの竿

この建物は小鳥居小路の歴史的景観をかたちづくっている重要なもので、この地域の明治時代を代表する町屋建築としての価値も高く評価できます。金物店から料理店へ用途は変わりましたがその土地らしさを保つ建物が活用されて残っていくことはとても大切なことと考えられます。

またまだ小鳥居小路をはじめ門前周辺には江戸時代の終わりが残っていますので、皆さんもおいでの際はよく目を凝らしてご覧になってください。



▲古川百貨店看板

太宰府の文化財

254

太宰府横嶽山諸伽藍図

—朝日地蔵を中心として—

江戸時代 福岡市博物館蔵



▲太宰府横嶽山諸伽藍図

市役所の通りから北へ、横岳の方へ上って行くと、左手に旭地蔵のお堂があります。ここには、お地藏様と自然石を使った碑があり、日々灯明やお線香の煙が絶えることがありません。なんでも願いを聞いてくださるお地藏さんとして親しまれ、毎年7月13日

に夏祭りが開かれ賑わいます。この旭地蔵の歴史は古く、今回紹介する「太宰府横嶽山諸伽藍図」に描かれています。この絵図は、鎌倉時代から戦国時代まで白川一帯を寺域としていた横嶽山崇福寺の諸施設の位置（伽藍）を示し、江戸時代に記された崇福寺の寺



▲今の「朝日地蔵」

その説話とは、「観世音寺の節分の行事に巻き込まれ、鬼として叩かれた堪慧禪師は、自らを嘆き朝日山の東麓に穴を掘り、読経を唱えそのまま息絶えた」というものです。この説話は歴史的に見て、当時新興勢力であった禪宗が、旧来の官寺であった観世音寺にとって脅威となり、対立関係に

あつたことを物語っています。この説話にみる「堪慧禪師の嘆き」は、実は堪慧禪師は自らを受けた仕打ちを宮中の貴族に訴え、禪師の学徳ゆえ横嶽山崇福寺を公の寺（官寺）に認めさせるといふ離れ業を成し遂げることになります。その後寺は隆盛を極めました。天正14年（1586）の島津軍による岩屋城攻めに巻き込まれ多くを焼失しました。現在は、江戸時代に福岡市千代に崇福寺として再興されています。

誌「横嶽志」（崇福寺所蔵）にあり、元和4年（1618）に描かれた図の写しといわれています。この絵の左下に「朝日地蔵」、また「朝日地蔵」の左には「朝日山」も見え、この「朝日地蔵」記載箇所が、現在の旭地蔵所在地であることがわかります。ここにはかつて「開基 堪慧禪師塔 延寶二年 吉塚宗也建」と記された碑が建っていました。延寶2年、時は江戸時代にあたり、その後の文書、絵にこの塔のことが記され、明治30年11月までは、こ

の碑が当地に建っていたことが追えます。その後荒廃し、昭和初期に「朝日地蔵」への想いを抱く方により復興され、戦後になり五条五組の方々により現在の旭地蔵として再興されました。横嶽山崇福寺は、仁治元年（1240）に臨済宗の禪寺として堪慧禪師によって創建され、その師円爾（聖一國師）を迎え寺が開山されます。この堪慧禪師の墓が、説話とともに朝日地蔵の地であると伝えられてきています。

朝日地蔵を復興された山内さんの証言では、昭和初期ごろ、碑は倒れ「ただの石」になりました。町なかの道、道ばたの岩に、「歴史」があるかもしれません。今日1日から文化ふれあい館で、「太宰府市民遺産展」を開催しています。皆さんが身近に目にする山、溝、大木に伝わる物語を知ること、生活の一部となって残っている「遺産」を感じてください。

▶航空写真(平成14年秋撮影の航空写真と平成15年2月撮影の発掘調査地写真を合成)



太宰府の文化財 (255)

現代にのこる条里^{じょうり} 向佐野・国分ほか 平安後期以前～

太宰府市内の地図を見ると、筑紫平野から福岡市に向う平野に沿って、また天満宮から宇美町に向かう谷合に沿って道路・線路が延び、それに付随して建物が集中しています。現代の街が地形と交通によって整えられてきたことがわかります。

が行われましたが、この制度とともに整備された水田区画と考えられています。一辺が1町(約109m)四方で区切られているのが特徴です。近年、都府楼南地区の発掘調査で、少なくとも1000年前にはあった1町四方の土地区画が見つかりました。

ところが、場所によっては、水田や宅地が地形に沿わずにある大きな地割りがきちんと区切られている場所があります。市内ではそれが大宰府条坊とよぶ古代都市の区画に由来するものもありますが、条坊の外側にも一定の地割りがあり、都府楼南地区西側の水田地帯や国分地区、また隣の筑紫野市二日市以南などでも見ることができます。

写真をご覧ください。見つけた1町四方の区画と同じ大きさの区画が、いくつも広がっていることがよくわかります。このことから、この付近の条里は、少なくとも約1000年前(平安時代後期)には機能していたと考えられます。

実は、この地割りは1000年以上前から続く古代の水田区画といわれるもので、「条里」といいます。約1300年前に整備された律令制度では、人々に口分田(くぶんでん)を与え、租税を徴収する制度(班田収受)

近年、米作りの機械化とともに、全国各地で水田の再編(圃場整備)が進められ、こうした古代から続く水田風景が残っているとところは少なくなりました。水田はすいぶん減ってきましたが、数少ない1000年以上続く風景を探しに出かけてみてはいかがでしょうか。

太宰府の文化財

256

大宰府出土の木印



印面文字



木製の印章（木印）が出土した大宰府史跡第170次調査地は、大宰府政庁跡の西側で役所が建ち並ぶ推定府庁域に接しています。ちょうど政庁跡から西へ450mほどの所で、現在の学業院中学校グラウンドに位置しています。

遺跡の時期としては、奈良時代にあたる8世紀前半〜中頃の遺構が中心となり、8世紀後半までの遺構が主たるものです。木印は、この遺跡内の木枠を使った井戸から出土しました。井戸の年代から木印の使われていた時期は、ちょうど9世紀初頭であったと想定されます。

この木印は全国的にも珍しいもので、古代の木印の出土例としては6例目にあたります。しかも当時の都以外から出土したものとしては、初めてののものでした。

木印の大きさは、文字が彫つてある印面が3.1×3.4cm、高さ8.9cmを測ります。頂部は3方向から削り込んで

切り離して側面もやや粗い調整をされています。紐の加工がされていないことなどから未製品の可能性も考えられます。印面文字を詳しく見ると、右の字は「直」の異体字の「直」で、奈良・平安時代には一般的に用いられていた文字です。左の字は、「嶋」を若干省略したものです。まとめると、字体としては楷書体に近いもので、右から読むとするなら、「直嶋」と判読できる2文字が確認できました。

この「直嶋」の印は、個人名・家名を刻んだいわゆる「私印・家印」と呼ばれるもので、姓・名を組み合わせた個人印だと想定できます。当時の大宰府の情勢を考えますと、対馬嶋から大宰府に「府卜部（府の卜部。卜部とは神祇官の宮主などが下級職員として任じられ、亀の甲羅による卜占を行う。）」に、上番していた直氏の嶋という人物（直嶋）、あるいは嶋を名の第一字目にもつ人物の名を刻したもの（例

えば、直嶋麻呂、直嶋足など）だったのではないかと考えられます。

この印章がどのような使われ方をしたのかは、今後の研究が進まないとわかりませんが、当時の大宰府における官人の様子を想像できる貴重な資料だと思われまます。

現在、この木印は昨年度にオープンした九州国立博物館の常設展示内の「漢字文化の広がり」コーナーにおいて、太宰府市で出土した他の印章と共に展示されていますので、訪れた際は注意して見て下さい。国宝・重要文化財が数多く展示されている中に、ちょっと控えめですが、この木印にもきちんとスポットライトが当たっています。

なお、この木印についてさらに詳しく知りたい人は、太宰府市の文化財第36集「大宰府史跡」に詳しく記載されていますので参考になさってください。

（文化財課 高橋）

太宰府の文化財

257

若宮神社とムクノキ

国分4丁目

国分寺の北東にこんもりと生い茂る森があり、その下に毘沙門堂と小さな石祠があります。この石祠は若宮神社といわれています。

若宮神社の石祠は、正面75cm、側面60cm、切妻造の建物で、コンクリート敷の上に、地覆石を置いて建っています。正面に観音開きの石造扉をた

てていますが、一部破損して保存状態は良くありません。その扉の内側に「亨和四甲子年ノ二月上旬」と陰刻があり、建立年代が亨和4（1804）年とわかります。また、西側面、背面には氏子とみられる合計22人の氏名が刻まれています。石祠の中には自然石の御神体が祀られています。太宰府地域では石祠を本殿と

している神社が多いです。若宮神社のものでその中でも最も古い石祠です。

この石祠を覆うように茂っている3本のムクノキの巨木があり、樹高は124〜185m、幹周は25〜49mを測り、市内最大のムクノキ群です。ムクノキにはキツタなどの植物が巻きついていて、異様な雰囲気をかもし出しています。この若宮神社とムクノキの森については、明治時代の初めに書かれた「福岡縣地理全誌」に「若宮神社 村ノ東一町許林中ニアリ。石祠。三尺四面。樹ノ枝ヲ取レハ。崇リアリトテ。里民恐ル。」と記され、若宮神社のある森は枝を取ると

祟りがあるということで、地域の人々によって恐れられていたことがわかります。しかし、近年その祟りの呪縛がなくなってしまうのか、枝を伐採することが多くなっています。今年4月にも東側の枝を大きく切つてしまい、かつて自然のままにこんもりと繁茂していた樹形から大きく様変わりしてしまいました。

（文化財課 宮崎）



太宰府の文化財

(258)

宝満山と文化的景観



▲白川から宝満～三群山を望む

「文化的景観」とは自然と文化の共同作品とも言えるもので、長期にわたる人類文化の進化・発展を示すもので自然景観に営まれた文化遺産などがこれに相当します。この新しい文化財保護の考え方に基づいて平成16年に「紀伊山地の霊場と参詣道」の名称で、和歌山から三重、奈良に連なるいわゆる「熊野古道」などが世界遺産に登録されました。

九州にも古い信仰で結ばれた山のルートがあります。それは豊前と筑前の境にある英彦山から甘木の古処山などを通り、宝満山に至る峰、宝満山から北に向かい三郡、若杉山を通り宗像孔大寺山に至る峰々などがそれにあたります。宝満山は古代の役所であった「大宰府政庁」が成立した頃から山頂や山中で土器を用いた祭祀がおこなわれるようになり、それまで宗像の沖ノ

島でおこなわれていた海上交通などに係る国境での祭祀を引き継ぐ形で、遣唐使の人唐などのつどに鏡や鏡・緑釉陶器などを使用した祭祀が続けられました。また、平安時代以降には連なる峰々に経筒が埋められ、その山裾に山岳寺院が次々と建設されました。この古代にできた信仰のラインは後の中世や近世に修験道の人々が受け継ぎ、江戸時代には宝満山では春に三郡・若杉を通り宗像から博多、福岡城春日神社、武蔵寺を巡り宝満に戻る「春峰」（峰入り）が、秋には英彦山までの「秋峰」という修行の道の形で山なみが利用されました。現在でも宝満から若杉までの「三郡縦走」などという言葉での登山がおこなわれるなど、時代によりその形を変えながらも峰をつなぐ道が人々に意識されてきました。宝満山から西には基山から脊振山系伝いに西



▲現在の春の峰入り行事(宝満山山頂)

彼杵に至るルート、英彦山から東は求菩提山から八面山、国東半島に至る信仰のルートもあり、まさに都から瀬戸内海を通じ、九州から朝鮮半島・大陸に通じる山伝いの信仰の道が存在し、その東西と南北の道が宝満山でクロスしていたことが知られます。

険しい宝満山を中心とするこれらの山中に神仏の遺跡が多いことにはこのような背景があります。山なみそのものが一つの文化的な景観と考えられる所以です。

(文化財課 山村)

太宰府の文化財

(259)

特別史跡大野城跡

原地区城門跡

四王寺山にある大野城跡は日本書紀によると天智4年(665)に大陸との軍事的緊張を背景に基肄城とともに建設されました。水城とあわせて太宰府の小盆地を取り囲んで外敵から守るため、また、大宰府に攻め込まれたときに逃げ込むために築城されたと言われています。形状はすり鉢状の山を土塁と石塁の城壁で取り囲む抱谷式山城と言われる



▲城門跡から太宰府方面をみたところ



▲城門跡を上から見たところ(下が城内)



▲空缶出土のようす(右下が扉の軸受の石)

もので、城壁の総延長は8kmほどになります。その中には倉庫群と考えられる約70棟の建物跡が残っています。また、水門や城門があったことがわかっています。天満宮の参道周辺から四王寺山を見ると稜線に箇所バリカンで刈ったように樹木のない部分があります。ここは平成15年7月19日の豪雨により土塁が崩壊した場所です。原地区城門は平

成16年度に土塁の復旧作業をしているなかで発見されました。土塁を幅3.3m、高さ1.7mほどで切り通し状に開けています。中からは門柱を据えたと考えられる直径約80cmの穴が両側に各1穴づつ見つかりました。また柱穴より2mほど外側で門扉の軸を受けていた穴のあいた平坦な石がやはり左右一石づつ出土しました。門扉だけでは立たないので柱の跡が近くにあるはずですが見つかりません。柱穴があるところでは柱穴があるところで使用していたものが改修され移動し柱をのせる礎石など別

の用途に使われたことも考えられます。切り通しの両側には石垣が、通路部分には石敷きがありますが、これも改修の際につくられたようです。屋根はどのようなものであったかは想像しかできませんが、周辺から瓦の破片が多く出土していることを思うと、瓦葺の門だったと考えられます。今は再び埋め戻して将来のために壊れないように地中に保存しています。

ところでこの城門は戦後までくぼんでいてどうやら人々の通路になっていたようです。江戸時代後期に描かれた「太宰府旧蹟全図」には通路の印が付いています。また、切り通しの両側の石垣には現代の積み方で作られている部分があり近年まで手入れをされていたことがわかります。さらに、切り通しを埋めている土の中から清涼飲料水の空き缶が出てきました。ここが通路であることが皆が忘れてしまっていたのでした。人々の記憶から消え去っていたために城門は改めて「発見」されることになりました。

文化財課 城戸康利

太宰府の文化財

260

大宰府条坊跡第158次調査

鎌倉時代の宴のあと

「鎌倉時代の宴のあと」と見られる遺跡が出てきました。

場所は現在の西鉄五条駅前。ロータリーを整備するにあたり埋蔵文化財の発掘調査を行ったときに、大量の土器が捨てられた大きな穴が見つかったのです。

この穴は東西に約20m、幅5m、深さ約60cmの長い穴で、その中から土師器の小皿・杯がたくさん出てきました。この穴は、その形から溝と考えられ、その周囲には建物、井戸などが確認されていることから、ここで生活していた人々が捨てたものと思われる。

では、なぜこのように多くの土器が捨てられたのでしょうか？それは土器が出土した状況や土器が持つ情



▲宴のあと (多量に捨てられた食器)

報で読み取ることができません。まず、穴は時が流れるにしたがって、泥が流れ込んだり人為的に埋められたりして様々な土が重なって、ケーキのような層が幾重にもできていますが、この穴の場合その中の三つの層に

多くの土器が集中していることから同時期に捨てられたものということが分かります。また、その土器の形からいつ作られたものであるのかが分かりますので、鎌倉時代の終わり頃(元寇の頃)という時代の特定もできるのです。また、それらの土器の多くが、現在の酒杯や取り皿と同じ役割をしたと思われる、小皿や杯であり、長期間は使用されてい

ないまだ真新しい様子から、多くの人が一度に集まり捨てたものだと分かるのです。多くの人

が一同に会し、杯を使う行為、といえは皆さんもお分かりの「宴」が想像されますね。酒を酌み交わし、馳走を食し、唄や踊りもでたのかもしれない。しれません。そして宴が終わると、今の紙コップや紙皿のような感覚で穴に投げ捨てたのでしょうか？。このような遺跡は、近くでは博多遺跡群に、また京都や鎌倉といった多くの人が集まった処、そして奥州平泉の柳御所でも見つかっています。多量廃棄の裏には、時代世相や、土器の作り手を支える人々の財力の大きさも見られると同時に、ものを大切にしない心の表れも読み取れることもできましょう。このように、多量の土器を消費し捨てる行為は、太宰府では平安時代の中頃から見え始め、その終わりころに最も盛んになります。当



▲宴のあと (整理後、文化ふれあい館で保管しています)

時は環境の温暖化とともにものが溢れ、いわば「バブル期」であったのかもしれない。現世は長かった不況から次第に脱しつつあるといわれています。今年も良い年であることを祈念し、飲酒運転、街を汚すこみ捨てなどなさいませぬよう。宴のあとの始末を、ものも人も文化財課 中島恒次郎